

# おい抜かされる喜び

——教育の中における障害児差別について——

福井達雨

## ☆ 一柳満喜子先生

私は、清友園（現、近江兄弟社幼稚園）という、滋賀県近江八幡市にある、キリスト教主義幼稚園で、幼児教育をうけた。

ここに、園児から「オバチャン オバチャン」とよばれている一柳満喜子という、先生がいた。

恐らく、この先生は、日本の幼児教育史の一ページを飾る優れた幼児教育者であると、私は、考えている。

満喜子先生は、九十歳近くでなくなりになったが、この先生のもの、なつかしい思い出がいくつか、心に残っている。

お八つに、キントン豆がでてきた。

キントン豆は、豆より、おつゆの方が甘くて、おいしいものである。

私は、そのおつゆの魅力に耐えかねて、お皿に残っているおつゆを、長い舌を出して、ペロペロとなめてしまった。

これを見つけた満喜子先生は、烈火のごとく怒りだし、激しい言葉がとんできた。

「達ちゃん、行儀が悪いですよ。そんなことをするのは人間でなく、犬やねこです」

私の首に大きな鈴がぶらさげられ、二時間ばかりも、教室の片すみに立たされたのである。

幼稚園の窓のガラスぶきをしていた。

そこに満喜子先生が来られ、そして窓のさんを指でスーッとさわされた。その指先に、ほこりがついた、とたん、

「達ちゃん、掃除というものは、目に見える所より、目に見えない所を美しくするものです。掃除は心でするものです」

と叫ばれると、私の持っていた雑さんを取りあげ、私の顔に投げつけられた。

中学生の時、満喜子先生のお宅で話をしていた。

私が、満喜子先生の気持ちを害するような、発言をした。

カッとされ、感情が思わず爆発したのであらう、自分のはいていたスリッパを持つなり、それで、私を激しく、うちたたかれたのである。

### ☆ 完全にむかって努力する

こんな、いくつかのエピソードが、今、なつかしく、心に残っている。

このことを想い出すたびに、私は、素晴らしい幼児教育をうけたと、誇りを感じるのである。

このごろ、私は、幼稚園や保育園の講演に出かけることが多くなった。

そして、何か、心ざびしく帰ってくることが多い。

確かに、現代の幼児教育は、形がすっきりとし、赤、黒、青と色とりどりで、美しく、整然としてきた。

しかし、何か欠けていることを思う。それは、子どもと先生が、激しく、身体をぶつけあって火花を散らし、汗を流し、涙を流している場面に出会うことが、少ないことである。

私は、激しい幼児教育をうけた。

満喜子先生は、激情の人であり、愛の炎ですべてを燃やしつくす人であった。

自分の持っている良点も、欠点も、すべての持っている人格を、幼い魂にぶつけ、人格移行の中で、自分の生活を、理想を、身体をとおして、ぶつけてくださった。

満喜子先生は、日本的な人格者ではなかった。時には、恐ろしさを感じさせ、このような感情的な人が、と思う時もあった。

しかし、私は、愛に徹した幼児教育者であったと思っている。満喜子先生を、想うたびに、

「教育者とは、欠点の多い、弱い人間が、それでも、子供を完全にむけて努力させ、自分が完全にむけて努力する姿を持っているものだ、すなわち、教育者とは人格者像でなく、努力像なんだ」

こんなことを、強く教えられるのである。

満喜子先生から、強烈な心と人格をぶつけられ、それが、今、重い知恵おくれの子どもの教育をしている私に、いきづいていくことを思う。

幼児教育者とは、素晴らしいものである。

### ☆ おい抜かされる喜び

先日、私が講演をしていると、会場の前列で、ポロポロと涙を流している老婦人が、おられた。

よく見ると、幼稚園時代の、S先生だった。

講演を終えて、S先生の手を握りながら、ご挨拶をした。

「久しぶりです。なつかしいです」

「あなたが、講演台に立った時、弱虫で、意気地なしの達ちゃんか、こんな大きな会場で、よく話ができるのかと、心配で心配で心臓がドキドキして、顔があげられませんでした。

そして、話を聞いているうちに、あの達ちゃんが、こんな素晴らしい講演をするようになったと思うと、うれしくて、涙が止まりませんでした。

達ちゃん、立派になってくれましたね」

S先生は、また、涙を流された。

幼稚園の先生にとっては、どんな大の男でも、幼い時の姿が心

に残り、生き続けているのであろう。

幼稚園の先生は、人間の心の故郷である。

教育者の喜びとは、自分と共に歩んだ子どもたちに、おい抜かされる喜びであらう。

人間は、他者におい抜かされることは、苦痛なものである。そして嫉妬を感じ、劣等感を持ち、意地悪なものを動かすことが多い。

学校時代の友だちが、自分よりも出世したり、有名になると、"学校の時、私の方が成績がよかったのに" などと思って、心おだやかでないものだ。

この愛は、嫉妬や劣等感を感じるエロスの愛である。

しかし、教育者は、教えた子どもが、自分の持っているものを、受けつぎ、そして自分をおい抜かしていくと「あの子は、よくオシッコをたれ、弱虫だったのに、有名になってくれた」「やんちゃな子だったのに、立派な人間になってくれた」と強い喜びを感じるものである。

嫉妬も、劣等感も感じない愛、これこそ、教育愛、アガペーの愛である。

## ☆ バカになれ

さて、私は、重い知恵おくれの子どもたちと共に歩みはじめて、二十四年を迎えた。

この二十四年間、私は、子どもたちから、一度も、おい抜かされる喜びを持ったことがない。

重い知恵おくれの子どもは、知的にも、心理的にも、機能的にも発達が遅れ、肉体的にも成長が弱い。

このため、将来、社会に出て出世したり、リーダーシップを持つことはないだろう。

このような意味で、この子どもたちは、私たちを、おい抜かすことはないのである。

また、止揚学園をやめていった子どもたちから、手紙をもらったこともない。「先生、こんなに立派になりました」「クラス会を

しますから出席してください」「先生に教えてもらったことが、心に生き、感謝しています」

こんな言葉を、かけられたこともない。

教育者にとって、子どもたちからおい抜かされないことほど、寂しいことはない。

また、おい抜かされない世界は、刺激がなくマンネリズムにお

ちいりやすい。

この「寂しさ」と、「マンネリズム」を克服することが、障害児教育の姿勢を、決めていくのである。

私は、寂しさとマンネリズムにおちいった職員に、いつも大声で「バカになれ」と、どなりつけている。

「バカになれ」とは、先生側が、上の立場に立って、自分の次元にまで、子どもを引き上げようと無理をしないで、先生側が、子どもの中に下りていき、子どもの次元の中で、子どもの心を感じて歩んでほしいと、いうことである。教師側が、子供側に下りていく。この方向こそ、真の愛の姿勢であろう。

障害児教育とは、おい抜かされる喜びを感じる愛はなくとも、「バカになっていく」方向を持った愛は、育てることができる。

この愛を、バックボーンにして、重い知恵おくれの子どもたちと共に、歩み続けたいと、思っている。

## ☆ おわりに

幼児の教育誌に、教育の中における障害児差別について書かせていただき、これが、最後のものになった。

私は、幼児教育が、障害児差別をなくす、一番大切な世界であり、障害児の幸は、現代の幼児教育者、両親の姿勢にかかっている。

ることを訴えてきた。

この長い間、いろいろと尽力をしてくださった、赤間峰子さんに、感謝したい。

一年ほど前、NHKラジオで、私の障害児差別に関する放送を聞かれた赤間さんが、「現在の幼稚園、保育園においても、障害児問題は、大切な教育の問題です」と、丁寧な原稿依頼をうけた。それ以後は、私の方から無理にお願いして、書かせていただいた。

そのたびに、心あたたまるハガキを、何度も赤間さんからいただき、うれしく、また、励まされる思いであった。

発行者の津守真先生（一度もお会いしたことはありませんが）にも、心から感謝し、お礼を申し上げます。

いつの日か、障害児が、胸をはって歩ける日本社会が生れ、個の連帯が充満することを、念じつつ、これからも、手に豆をつくり、額に汗し、教育の土方になって、歩み続けたい、こんなことを、心に秘めている私である。

（止揚学園）



幼児の教育 第七十四巻 第七号

七月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十年六月二十五日印刷  
昭和五十年七月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二

印刷所 図書印刷株式会社

110 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレーベル館にお願いいたします